－ただキリストと共に歩む－

水 戸 無 教 会

第　６８　号

編集 半 田 梅 雄

※※

手　　紙……………………………………諏　訪　熊　太　郎
私 の 信 仰……………………………諏　訪　熊　太　郎
諏訪先生と水戸…………………………半　田　梅　雄
後　　記

※※

手　紙

諏訪熊太郎

ご丁寧な新年御賀状ありがとうございました。

病弱の私も今度八十の新春を迎え驚嘆感謝致して居ります。次に過日古い物を整理して居りました時に先年羽黒山で話した時の原稿に目が止まり、どんな事だったかと読んで見たところ、今日の私の信仰そっくりであり、且つ自分の信仰というものをこれほど纏めて話した事もなかったので、価値の有無は別として、ともかく自分の記念品としては良い物と思われました次第、それで閑暇にまかせて清書をしましたので、一部同封申上げます。御ひまの時に御笑覧頂ければ幸甚に存じます。

主の御恵み貴家に豊かに加えられますよう御祈り申上げます。

一月十四日

（半田梅雄あて）

私の信仰

昭和三十七(一九六二)年七月二十八日
羽黒山聖書講習会にて話せるもの

諏訪熊太郎

ピリピ人への手紙第二章十二節〜十三節

私の愛する者達よ、そういう訳だから、あなた方がいつも従順であった様に、私が一緒に居る時だけでなく、　居ない今は一層従順で居て、恐れ慄いて自分の救いの達成に努めなさい。あなた方の内に働きかけて、その願いを起させ、且つ実現に至らせるのは神であって、それは神の善しとされる所だからである。

黒崎先生から、私もお話をする様にとのお言葉を、ずっと前から頂いて居りましたが、私としてはどうしても其の気に成れなかったので、固くお断りをして参ったのでありましたが、最近になって又々そのお勧めを頂いて見ますと『どうも之れ以上の御辞退は宜しくない』との気持ちが起って参りましたので、ともかくお受けを致した次第でございます。

併し私には、元々学問の事は判りませぬから、然ういうお話は出来ませぬし、私に出来る事は唯だ一つ『自分の所信を陳べる』という事のみなんであります。で、それを陳べて見たいと思います。題をつけるとすれば『私の信仰』であります。

私は元来、からだが弱く、今まで生きて居る者とも思われなかった関係もありまして、信仰の重要問題に就ては疑問のある侭に放って置く事は出来なかった。で、拙速かも知れないが、自分なりには解決がついて居りますので其れの若干を陳べて見たいと思います。

(一)［救いの事］　先ず第一に『自分は救われて居るかどうだろうか』という問題です。その点に就て私は『私は救われて居る』と確信して居る者であります。そして其の証拠は如何と問われるならば私は答えます。

私はイエス様を救主と信じて居る。そしてそのイエス様から救って頂きたく、イエス様に信頼をして居る。之れが、私がイエス様から救われて居る事の何よりの証拠である。

と答える者であります。何故か、と言えば、イエス様は、御自身に信頼する人である限り、絶対に捨てる事はない、必ず救って下さる御方に在すからであります。

で、只今現在、そういう風に救われて居る事は間違いないですが、では之れから将来は何うだろうかという事になれば、私は大丈夫と思って居ります。何ぜかと言えば、私がイエス様を信じ始めてから今日に至るまで、約五十年の生涯でありますが、その間というものは、それは見様によっては『イエス様と私との結び付きの堅くされる為めの訓練の生涯であった』と言うべきものでありました。訓練でありますから、それは生まやさしいものではなかった。時には其のきびしさに、結びの綱も断ち切れやせぬかと危ぶまれる事もあった様なのでありましたが、併し結局の所は、何うやら斯うやら切り抜けて今日に至りました。そして然ういう風に、戦いを切り抜けて参りますと、其の度び毎にイエス様との結び付きは愈々堅固なものにされるのでありました。ですから今では其の結び付きは相当に堅固なものとされて居りますし、これから将来之れが断ち切られるという様な事はあり得ない。イエス様は必ず救いを全うして下さる事と堅く信じて居る様な次第であります。

では斯うして救いを頂いて、将来その救いが完成されます場合に、私はどんな風にして頂けるだろうか？という事になれば、私は其処に思いの至ります度び毎に、実は心の躍る思いを禁ずる事が出来ないのであります。先ず何よりも嬉しく思います事は、心を清めて頂く事です。私は今の自分の心の有様を眺める時には泥沼を眺める様な気がします。全然、天に適わしからぬ地獄向きの精神だと思って居るのです。そこに気がついた時、昔は苦しみました。併し今ではそれが為めに心を痛めるという事はありませんのです。然ういう汚ない有り様を今更の如くに強く感じさせられる事が、今でも屡々ありますが、然ういう度び毎に私は、自分をば思いっ切り軽蔑します。『ざまあ見ろ！此の姿よ！』然るにこんな奴をすらイエス様は、立派な立派なイエス様と同様な、あの愛の心、あの清い心、あの気高い心に完成して下さるのだ。何という感謝であろう。と、自分の姿の醜さを見れば見るほど、イエス様への感謝が湧き上がって来るのであります。

而かもイエス様の救いの御業は尚も高く進められるのでありまして、然ういう清められた精神に適わしい所の身体が与えられる事になりますし、更に、それに適わしい所の住所も与えられる事になります。即ち今の此の身体は死んで腐敗しようと灰になろうとイエス様は御自身の復活体と同様の栄光の体を与えて復活さして下さる。「彼は万物を御自身に従わせ得る力の働きによって、私達の卑しい体を、御自身の栄光の体と同じ形に変えて下さ

るであろう」(ピリピ三・二一)とあるが、全くその通りにして頂く事に相違はないのであります。そして、然ういう者達の住むに適わしい住み家即ちいわゆる「生ける神の都」「天のエルサレム」に住ませて下さる。そして其の処に於ける非常な栄光の御交りに入らしめ下さるに相違はないと信じて居るのであります。之れ、今の私の確信であります。

(二)[聖霊の事]次には聖霊の問題です。聖霊を受けたとか受けないとか、よく問題にされる様でありますが、其の聖霊、即ち神の御霊が、今、私に宿って居られるであろうか、何うであろうか、と言えば、其の事に就ては私は『私の中には聖霊宿って居られる』と確信致して居る者であります。それは何によって判るかと言えば『私はイエス様をば救主と信じ、そのイエス様に信頼をして居る』此の一つの事実です。これが、聖霊私の内に宿って居られる事の何よりの証拠であります。何となれば「聖霊によらなければ誰れも〝イエスは主である〟という事が出来ない」(コリント第一、十二の三)と明記してもあるし、又パウロは、あの欠陥の多いコリントの信者達(声を大にして叱らなければならない様なあのコリントの信者達)に向ってさえも「あなた方は神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿って居ることを知らないのか。」(コリント第一、三の十六)苟もキリストを信ずるあなた方の内には聖霊が宿って居なさるのですぞ、従ってあなた方は神の宮であるのですぞ、と呼びかけて居る様な次第なんでありますから『イエス様を救主であると信じてそのイエス様に信頼する者に成って居る』という其の事実は、これ、聖霊が我が内に在すという事の何よりの証拠であると私は思って居る者であります。

で、私には、奇跡を行う力もなければ、異言を語る事もないのですが『私の内には貴き聖霊が宿って居られ、私は聖なる神の宮たる者である』という事は少しも疑う所なく確信致して居るのであります。

(三)[生活の事]最後に、では我々信者たる者の日々の生活の仕方は何ういう風にすればよいか、という事ですが、其の点になりますと、私の今の行き方は極めて簡単であります。従って極めて呑気というか安楽であります。

(A)【精神生活の行き方】元の私は、ひどく聖書の律法を気にかけました。聖書のあそこに何と書いてあるから、あの様でなければならないという風に気にかけましたから、其の当時の生活態度は戦々競々たらざるを得ないものでありました。然るに今の私は、然ういう風な行き方を致しては居りませんのです。では何う

いう風にして居るかと言えば、唯だ胸に響く所の御霊の御声に従って進んで行けば良いし、我が行き方は是非とも然うでなければならんと思って居るのであります。

では其の、胸に響く御霊の御声とは何ういうものを指すか？と言えば、それに就ては少しく説明をしなければならぬと思います。私は前に、聖霊私の内に宿って居られる事を確信して居るという事を申しましたが、その聖霊の宿り方というものは何ういうものかと言えば、それは例えて言うならば、私の胸の中にイエス様からの受話器が取り付けられた様なものだと思って居ります。イエス様が聖霊を受けられた時は、天開けて其処から聖霊鳩の如くに下って来るのをイエス様はご覧になられたとの事でありましたし、其の後、最初の弟子達に言われた所によりますと「よくよくあなた方に言っておく。天が開けて、神の御使達が人の子の上に、上　り下りするのを、あなた方は見るであろう」と言われたのでありました。

そういう点から考えましても、聖霊が我々に宿るのは、それは一箇の宝珠の玉が宿る様なものではなく、将に、神と我れとの間に塞がって居るところの障壁が破られて、そこに連絡の道が開ける事であると私には解されるのです。それで私が前に申しました『聖霊宿ったと言う事は、私の胸の中にイエス様からの受話器が取り付けられた様なものだと思って居る』と申しましたのは、然ういう意味の事を申したのであります。

そして其の場合の放送者は勿論イエス様ですが、そのイエス様は、勿論今も生きて天に、神の大権の御座に座し、宇宙万有を支配して居なさるイエス様です。ですから私が頂いて居る所の聖霊は、私がイエス様に連なって居る限り、力を以て働いて下さるのですが、若しも私がイエス様に後ろ向きになって、イエス様から離れてしまったならば、其の時即座に、受話器の働きは止んでしまって、最早や何物でもなくなってしまう事勿論であるのであります。

兎もかくイエス様は、御霊によって其の御声をば、我々に聞かせて下さいますが、では其れを聞き受ける所の我々の耳は何であるかと言えば、前には『胸に響く』と申しましたが、もっときっぱりと言えば、『内なる良心』です。良心こそ、イエス様からの御声を聞き受ける『受者』となるのです。そして此の良心という受話者に響く神の御声なるものは、それは決して『稀れに』と言った様なものではなくて、『常に』です。何時でも不断にです。

母は其の幼児に対して常に御声をかけて居ると言うたら間違いでしょうか。私は然う言うてもよいと思います。言葉には出さない時でも、無言の声をかけて居ると言えると思うからです。恰も然ういう意味で、イエス様は、常に信者たる者に対しては御声をかけて下さって居なさるのであります。何もせずに休むべき時には無言の御声を、何かを為さねばならぬ事のある時には、義務感とか責任感とかを胸に(良心に)起して、然うしなければ相済まぬ様に働きかけて下さるのであります。

そして私の場合を言えば、その御声は、何時でも私に丁度よい程度に掛けて下さるのでありまして、其れは実に親切です。慈愛のお母さんが、三つ子には三つ子に適せる程度に、七つに成れば七つの子に適せる程度に、少しも無理なく又、甘やかしもせず最も適当に御声をかけて下さる様に、イエス様も、私には私に最も適当せる様に御声をかけて下さるのであります。それで私の仕事は、此の御声に従う事であります。唯だそれだけで良いのでありまして、何も余計な事をする必要もないのです。私は断然その様に思って居る者であります。だからして今の私は、昔、律法相手に生活をした時とは全く異い、至極のんびりして居りますし、心平安であるのであります。

唯だ其の間に特に注意すべき大切な事は、御声を聞き逃がしたり、聞き違えをしたりせぬことです。其の為めには、受話者たる良心という耳に故障が起ったりせぬ様に心掛けなければなりません。それには何うしたら良いかと言えば、御声が掛ったら即座に従う事です。従い従い迅速に従えば、良心はいよいよ清められる、いわゆる『善き良心』となるのです。然るに若しも其れに従わず、踏み付け踏み付け不従順にして居りますと、遂にはテモテ前書に「良心に焼き印を押されて居る偽り者」(四の2)とある様な状態にならぬとも限らぬのですから、此の点は特に注意をせねばならぬ事と思って居る次第です。

要するに、私の生活の仕方は、良心に響く御霊の御声に従順に従って行く。之れで宜しいのであって、之れが私の唯一の行き方でなければならぬと思って居るのであります。従って、私の行き方は、前から申して参りました通り、極めて簡単であり、且つ安楽であるのであります。

併し此の呑気安楽と申しましたのは、之は内側の精神生活の方面の事を申したのでありまして、外側の方の境遇的な方面の事を申しますならば、それは必ずしも呑気安楽といった風のものでは

なく、前にも申しました様に、其れは反ってきびしい訓練の連続と言うてもよいものだったのでありました。

（B）【境遇に対する行き方】　私は恥かしいですが、元来、弱虫でありますから、気の強い人には『これしきの事』と思われる様な事でも、私には随分痛く感ずるのであります。それで私の生涯というものは、それだけ余計に苦しみの多い生涯であったのでありました。では其の大きな苦しみに対して私は何ういう風に対しましたかと申しますと、初めのうちは、一時も早く然ういうものから解放される様に祈りました。病気の時には病気の早く癒される様に、又、嫌な事情が起った時は、然ういうものが一時も早く解消する様に祈ったのでありました。然るに今より十何年前の或る日の出来事以来というものは、私の苦難に対する態度は一変し、喜んで居ります次第ですから、今から其の事を申し陳べて終りにしたいと思います。

それは、時日を正確に申せば昭和二十六年四月八日の事ですが、其の時私は病床にありましたが、そこに、心を痛める事が色々と重なり重なり起って参ったのでありました。弱い私、もうやり切れない思いになったんでありました。寝ては居れない。起き上がって見るが一層苦しい。全く何うにもやり切れない思いになりました。その苦しい最中にです。私は思わずも斯う祈ったんでありました。「神様、あなたの与え給うだけを頂戴致します』と祈ったんでありました。声に出したか何うかは忘れましたが、それはどちらであっても同じ事、兎もかく然う祈った。そして然う祈りましてから私は反省をして見た。そして『おれは今、よい祈りをした。我が祈りは斯うでなければならんのだ』と強く感じたのでありました。祈りの意味を言えば、

私の心は、好きな事物はなるべく多く来る様に、嫌いな事物は成るべく来ない様に欲するので、神様からも然ういう風に与えて頂きたく、今迄は祈って参ったのですが、併し今度は然うではなく、神様が善しとして御与え下さるものであれば、好きな事物嫌いな事物、どれほど多くあろうと、少くあろうと、文句言わずに従順に頂戴致します。

という意味なのであって、之れでこそ神への本当の従順というもので、我が取るべき態度は斯うでなければならんのだと、強く感じたのでありました。

そこで今度は改めて此の事をば心をこめて御祈り申し上げた。

『今は、嫌に思います事がこんなに多くありますが、併しそれでも、之れが御意でございますならば頂戴致します。あなたの与え

給うだけを頂戴致します』という風に申し上げたんでありました。所が、心の中は、今までの苦しみが一変致しまして、愉快の様な軽い気持ちになったのでありました。そして結局に於ては、実際の事情も、そんなに大した事もなく好転したのでありました。それ以来というもの私は、嫌な事に会う度び毎に、今でも此の通りの祈りの言葉を繰り返して居ります。『あなたの与え給うだけを頂戴致します』です。斯う祈れば殆んど凡ての場合、心は平安に治まる事を経験しつつ今日に至って居るのであります。

結　語　そして此の態度は、之を言いかえれば、神の与え給う境遇に対し、心から従順に従うという態度なんでありまして、従って私の現在の信仰生活なるものは、

内なる心に於ては、その内なる良心の耳に掛けて下さる神の御声に従順に従わんとし、外なる境遇に於ては、これまた、神の御与え下さる所に従順に従わんとして居るのでありまして、一言以て言えば、

『神への従順』

これこそ私の実際生活の行き方となって居るのであります。

元より惰弱な人間の事ですから、それに背くような事も有り勝ちなのですが、兎もかく私の大方針としては其の様になって居るのであります。

そして私自身としては

私は本当に幸福な人間だ。

私の歩いて来た道は、

誤りではなかった。

本当の生命の道であった。

何とも有りがたい限りだ！。

と、神への感謝一杯であるのであります。

以上が、私の信仰の背骨であります。　（終）

諏訪先生と水戸

半田梅雄

「私の信仰」の著者諏訪熊太郎先生は、山形県鶴岡市にお住いで、今年八十才になられた。先生は、内村鑑三先生の特愛のお弟子の一人であられることは有名である。形式的なものにより頼む

ことを拒否された内村先生が、愛嬢ルツ子さんと諏訪先生に洗礼をさずけられたことは、無教会主義が、教条主義でない何よりの証明になると思うが、その基礎に生けるキリストの信仰、十字架の福音の本質があることを、私たちは深く考えて見る必要があると思う。

諏訪先生と水戸無教会グループとの関係は、昭和三一年四月三〇日、小貫武寿兄の結婚の祝会のときに始まる。現在水戸市において衣料、寝具を主とするデパートを経営される小貫兄は、その結婚式を、御両親や周囲の人々の希望を顧慮して日本式で挙げられたが、

たまたま諏訪先生の来水を期に、無教会グループ数名の列席の下に、霊的結婚式の祝禱をお願いしたのであった。当日先生は、お腹を害されており、長途の御旅行のお疲れも激しかったと思われるのにかかわらず、すべてを主のお導きのままに、この、世にも不思議な二度目の結婚式の司式をされたのである。長身痩軀の、しかし、全き謙遜そのものの先生によって、地上の肉なる結婚は、天なる霊のものに高められるのを覚えた。

以来十四年、私たちの貧しい雑誌「水戸無教会」などをお送りすることによって、私たちの小さな感謝は主と先生に捧げられた。

私が今年差上げた貧しい年賀状に、まことに丁重な御返事を下さり、さらに一字一字丹念に浄書された「私の信仰」の原稿を御恵送下さったのである。後進への深い御厚情に涙のあふれるのを禁じ得なかった。

ここに先生の御許しを頂いて、「私の信仰」を「水無」誌の特集として発行するに当り、未だ先生を知らない方々のため、先生の御生涯の一端にふれ、参考に供したいと思う。もちろん拙い私の筆で、先生のすべてを書きしるすことはできないし、そのような不遜は許されてはならないので、先生の御著書「信仰一人旅」によって略記するに止めたい。

諏訪熊太郎先生が、どういうお方であり、歩まれた信仰六十年の御経歴がどのようなものであるかは、前述の「信仰一人旅」にくわしい。

「思えば苦労の多い生涯であった。

恵まれた生涯であった。

少しの力で努力した生涯であった。」

と、著者の自序は始められているように、この世的に見れば、実に苦難の連続ともいうべきものが、その御生涯であった。結婚後わずか四年と三ヶ月で、産褥熱の高熱が原因で、精神病者となられたゆき夫人は、その後足かけ三十一年の間病み続け、病院と自宅の檻置室より出でることなく、五十四年の生涯を終えられたのである。

ゆき夫人の発病当時、小さいお子さん三人をかかえ、病気の夫人の身の回りのお世話をする先生のお姿を想像するとき、ヨブの

苦難を思い起す。間もなく二女知恵子さん、御母堂の逝去にあわれるなど、人生の破たんは、次々に先生を襲った。ある日の日記に、

「夕食せんとするも、残飯の外に変色したる沢庵二、三片あるのみ、子等とこの食卓を囲む。味噌一皿を取り来りて、これをつつきながら共に食う。『昼食はどうしたか』と聞けば、〝紫蘇の葉きざみと梅干でたべた〟と言う。可哀想に思ったが、かかる経験も可ならんかと思い感謝して食し、『うまいのう』と私が言えば、〝ううん〟と子等は答える。時に一人は言う、〝湯に味噌を溶かして飲みたい〟と。そこで茂一郎(親しき隣家)に湯をもらいに行けば、図らずもお汁一鍋を贈られた。子等はその中のさやえん豆片を見て狂喜し舌鼓を打った。」

と、ある。今日の昭和元禄時代には想像もできない悲惨ともいうべき生活がそこにある。

かかる苦難と悲嘆の連続の中にあって、よく意気阻喪することなく、すべての苦難と悲嘆のうちに、主の恩恵を見出し得た人は幸であった。おそらく先生の遭遇された人生の苦難は、人間の耐え得る限界、むしろ、限界を越えるほどのものであったのではなかろうか。しかるに、なお、先生の魂に感謝の杯はあふれ、他人にも、境遇にも怨みを向けることなく、その苦難の背後に偉大な救いの御手を感じ、低く低くへり下っておのれに悩みを与えるもの、おのれを苦しめ傷つけるもののために、あふれる感謝と愛の祈りを捧げられたのであった。

福音とは、「よろこびのおとずれ」だと人は言う。然り、たしかに福音は、よろこびの訪れに相違ない。しかし、人はそれをば地上の幸福と結びつけて解しようとする。いわく〝福音を信じる故に富と健康と地位と名誉が与えられた。〟と。従って、その祈祷も、わが一身の利益のため、わが家族の幸福(地上的な)のためなのが多い。だから、一たび地上の幸福をもぎとられると、たちまちみ言につまずき、人生に希望を失い、神も仏もあるものかと世をのろい、人を怨むものとなるのである。

しかし、福音が真に福音(よろこびのおとずれ)であるのは、地上的の幸福と御利益を与えるからではない。むしろ私たちに災厄と苦難と悲嘆を与え、しかもそれを独力をもって、然り、他人の力を借りず、内なる魂に力を与えることによって、乗り越えさせ、ついに感謝と歓喜の人とならしめるところにある。

世の制度、環境を変えても、必ずしも人の不平不満を取り除くことはできない。まして病気、そして、遂に人を死の運命から救い出す力は、他の何ものによってもできないであろう。福音は、この不可能を可能にする。それは、決して狂信者の自己陶酔ではない。冷静、厳粛、真摯に人生と取り組んだ人が、現実の苦難の中に　あって、謙虚に発する満足、感謝、勇気、希望の言によって証明されるのである。

世にキリスト者と称される者は必ずしも少くはない。しかし、現実にキリストの十字架の苦難と同様に、おのれに非がないのに受ける苦難をよろこんで負うて、神と人とに感謝と愛の祈りを奉げる人はまことに少ない。無教会だからそれが出来るのではない。教会だからそれが出来ないのでもない。実に人に頼ることなく、もちろん己れにも頼らず、ひたすら神に依り頼む者にのみそれが可能なのである。

このような福音信仰を頂いた人は、何と幸福なことであろう。かかる人こそ、すでに「永遠の生命の国」に移されたる人である。地上の生涯が、いかに満ち足りたものであっても、この無上の宝を知らない人は、やはり不幸の人である。

諏訪先生は、実にかかる意味における福音の生きた証人として、神に選び立てられた人であると信ずる。

イザヤ書五十三章に、

「彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。

彼は侮られて人に捨てられ、

悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。」とある。

主イエスは、実にこのような生涯を送り給うた。諏訪先生は、かかる主イエスによる生命の救済を、その苦難の生涯を通して実証されておられるように思う。凡そ偉大とか、知者、学者とかいう印象からはるかに遠い謙遜そのものの態度の中に、私たちは、福音のみに生きる一人の使徒の姿を見るのである。首都東　京を含む日本の大都会の何れにも住まず、北の国、日本海に近い鳥海山麓はいかにも先生の生活の場所にふさわしいとさえ思う。

最近の日本全体を覆っている病根は、人間と人間の信頼関係を、根本から抹殺する勢を持っているように思うが、これは一種の都会病といってよく、国籍不明の人間集団に咲いた仇華とでもいうほかない。人間は、もう一度出発点にたち帰って、やり直す必要がある。

福音の証人、真理の証者としての先生の伝道活動、そのすさまじい真理探究の精神は、直接著書に接することによって、一そう明らかとなる。一方に勤務と家庭を支えつつ、夜間徒歩で(後には自転車)知人一人もない農村を、一部落づゝ訪ねて、路傍に伝道する姿は、想像を絶するものがある。

その訪れた村落一四六、第一回伝道は、一個所三日、第二回は一個所二日、開会回数は、二一三回、延べ五五〇夜に及ぶ。暴風雨の日も、ただの一回も予定時刻に遅れたことがない。時には、一人の聴衆なき日もあった。それは、もはや、偉大とか、立派とか、人間的ほめ言葉をゆるさない、壮烈な真理それ自身の大行進、大進軍である。

このような面からのみ先生を考えると、あたかも、情緒に乏しいガリガリの勇者、猛者のたぐいのように誤解する向きもあると思うが、むしろ、少女のようなやさしいハート、臆病なはにかみ勝ちな青年の如き姿さえそこには見られる。ある婦人との交わりに見られる、罪悪感を脱するための激しいたたかい。ついにこれを聖化してすべてを聖手にゆだねるまでの血の苦闘、約十年に亘る愛と義の相刻を見るとき、到底形式的信仰者のうかがい知ることのできない厳しさがそこにはある。

それは、己れの持てるすべてを、聖手に打ち砕かれた者に始めて与えられる勝利の記録である。

例えその生涯が、恥辱と汚穢に塗り込められていようと、赤裸々に自己を聖手に委ねまつることのできるものは幸福である。

偉大なるかな真理の証人、福音の勝利者、私たちは、ここに単なる人を見ない。もはやそこには地上の人間はない。すべてが主の栄光の顕現に帰せられている。神こそわがやぐら、われらの強きたてである。

後記

十一月一日、山形県小国町の基督教独立学園を訪ねた。全山の紅葉に包まれた学園に一夜を過ごし、身も心も聖霊に満たされるのを覚えた。

翌二日、鶴岡市に諏訪熊太郎先生をお訪ねした。十数年ぶりにお元気な先生にお会いできて感謝の杯はあふれた。今年も残す日わずか、祈ります。（半田）

クリスマス記念

キリスト教特別集会

十二月二十八日午前十一時から

水戸市南町二丁目商店会館

題未定　桜井五郎

クリスマスの感想　吉原賢二

昼食後感話会、御家族の参加お待ちします。

水戸無教会　第六十八号
昭和四十四年十二月発行

水戸市緑町三―九―二六
水戸幼稚園内

発行人　松本文助
編集人　半田梅雄

（実費五十円　〒二十円）